2022/2/9
（オマケの「日本語教室」「一寸先は闇」＋要自眼観察）書庫版

「一寸先は闇」
という言葉があります。
一般的な解釈では
「明日は何が起こるかわからない。そして起こるのは大抵悪いこと（凶事）である」
というような意味として、です。
しかしよく考えてみれば、或いは観察してみれば
「明日は何が起こるかわからない。そして起こるのは必ずしも凶事だけとは限らない。信じられない程の慶事の場合もありうる」
つまりその確率がフィフティーフィフティーであるとすれば冒頭の
「一寸先は闇」
の一寸先は闇とも限らないわけですから
「一寸先は未知」
とするのが正しいような気も致します。
おそらく古代の人たちもそのことは分かっていたのだと思います。
では何故「一寸先は未知」を敢えて「一寸先は闇」と言い換えたのか？
昨今過度の悲観と過度の自己防御が増える中、上記の言葉では増々その度合いが膨らんで、委縮してしまう可能性が高まります。
なので、今こそ「一寸先は闇」を「一寸先は未知」即ち「突如いいことも起こるかもしれないよ」
と言い換えた方がいいような気もしたので、何で古代の人は敢えてまで「一寸先は闇」と限定した使い方をしたのかが却って不思議になってきたのです。
そこで、その理由を考えてみました。
その末に出てきた以下の解釈は自分の私見なのですが

「その方が、インパクトがあったから」
ではなかろうかと。
未知を「凶事」に限定した方が「注意喚起の度合いも上がるし」と考えての事ではなかったか？とも。
確かにこの場合は、言い方は変ですが意図としては「善意」が感じ取れます。
しかし同じ「インパクト狙い」と「耳に入り易さ覚えやすさ」が「悪意」や、そこまでいかずとも「恣意」「故意」を含んだ「誘導（弱みや欲に付け込んだおいしい話や引き回し）」に基づいて使用された場合はどうなるのでしょうか？
例えば
歴史を紐解けば「プロパガンダとアジテーションの天才」と言われたヒトラーさんとか、身近な処で言えばメディアや広告宣伝とか。
少なくともネット空間というのは全ての情報が 2 次情報、つまり加工情報です。自分が現実世界でじかに体験して得られる 1 次情報とは全く異なり、必ず「発信者」という名の情報加工者が存在しております。
その事実だけは肝に銘じておいた方がよかろうかともおもっております。
余談）
なので、
「まずは」自分の耳目で周辺現実世界を直接観察し、自分なりの視点を持った上でネットに接する事の大切さを日に日に感じて居る処でございます。